

世阿弥本による〈雲林院〉試演の会報告

西野, 春雄

(出版者 / Publisher)

The Nogami Memorial Noh Theatre Research Institute of Hosei University /
野上記念法政大学能楽研究所

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

Nogaku kenkyu : Journal of the Institute of Nogaku Studies / 能楽研究 :
能楽研究所紀要

(巻 / Volume)

9

(開始ページ / Start Page)

208

(終了ページ / End Page)

215

(発行年 / Year)

1984-03-31

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00020345>

世阿弥本による〈雲林院〉試演の会 報告

西野 春雄

能楽研究に大きな業績を残した元総長野上豊一郎博士の法政大学における功績を記念すべく昭和二十七年四月に設立された当研究所は、本年創立満三十周年を迎えた。それを記念し、57年10月2日(土)、水道橋の宝生能楽堂において記念能を催した。研究所では設立当初から普及上の計画の一つとして演能会の開催を予定事業に加えていたものの、私立大学のきびしい財政がそれを許さず、実現できないままになっていたが、創立三十周年の記念事業にそれを企画したところ、幸いに大学当局の御理解が得られ、鏡仙会の方がたや横道萬里雄氏をはじめ関係各位の御協力のもとに、このたびの試演能が実現したのである。以下、試演能の趣旨と経過の概要を報告する。

■ 選曲のこと

ただでさえ催しの多い昨今の能界である。研究所が新しく会を催す以上、古演出の復活や番外曲群に埋もれている名作の復曲、あるいは新演出の試みといった研究的な意味をもつ演能会が望ましく、脚本史や演出史を考える上にも意義のある演能をめざして選曲に入った。いろいろな作品が候補に上がり、野上豊一郎博士が推定された「葵上」の古演出(車の作り物とツレの青女房が出る)や世阿弥本の臨模本「弱法師」(ツレの妻と天王寺の住僧た

ちも登場する)の復曲なども有力候補であったが、最終的には「世阿弥本による〈雲林院〉」に決定した。

同本は同名現行曲(室町末期以後の各流諸本の形)の祖型と思われる古作の能で、応永三十三年(一四二六)十一月に世阿弥が書写し金春大夫氏信(禅竹)に相伝した作品である。前場は現行曲とほぼ同じだが、後場が全く違う。現行は後ジテ業平の霊が花の本に優美な舞を舞う遊士物であるのに対し、世阿弥本は高貴な姿の二条の後の霊か忽然と現われ、『伊勢物語』の大事を語るうち、後ジテとして後の兄藤原基経の霊が登場し、業平が盗み出して武藏塚に隠した妹を奪い返す物まねを中心に、「武藏塚」というのは実は春日野の内である」といった秘事の数々をワキ公光に伝授する内容である。このように世阿弥本と現行本とは大きく異なり、これほど大幅に変動した作品は他に知られていない。しかも歌舞能完成以前の物まね劇の面影が濃い世阿弥本は、現代の能との相違点や共通点を確認する上で最も魅力ある素材の一つであろう。

56年4月の、横道萬里雄氏、観世鍔之丞氏をまじえた検討会では、このような視点から世阿弥本による「雲林院」にきめ、その後、観世栄夫・宝生閑・野村万之丞・萩原遼子の各氏に加わっていただき、舞台化を進めた。また会場と日時は、大学当局の意向

もあり、大学から近く、かつ土曜日の午後と夜に限定されたが、秋の能繁期にもかかからず、幸運にも57年10月2日(土)の宝生能楽堂を56年4月段階で予約することができた。

■舞台化までのこと

台本を検討していくなかで、世阿弥本すら原形とはいえないのではないかと、という疑問を強くした。世阿弥本は前ジテの老人が業平の霊(化身)とみられるのに、後場に登場しない点が不審で、二条の后と共に業平も出、基経によって仲をひきさかれる形が原形であったのを世阿弥が改作したか、と疑われるのである。そこで、一度は業平をも出す形を作ってみたが、焦点が定まらず、舞台上の処理も難しいので取りやめることにした。

また、世阿弥本は間狂言について記しておらず、アイの有無も問題となった。協議を重ね、アイを出すことにし、創作した。それは、この曲の主題である『伊勢物語』の秘事が現代の観客にはやや耳遠いので、アイを活用して、それを解説しながら後場へつなげようとのねらいからである。しかも、ワキは秘事に明るい公光なので、応待するアイもそれにふさわしい人物をと考え、「間答アイ」を新工夫した表所員案、横道氏修正案、野村氏の意見等を検討し、最終的にはアイを同朋万阿弥とし、アイの語り主体の形に落ち着いた。シテが幕へ中入りしたあと、舟唄を歌いながら登場し、公光との間に「伊勢の大事」を展開する風雅な趣きの間狂言で、十分に解説の役割を果たしたと思う。このアイの段の詞章は資料4に掲げた。なお、これ以外にも様々な形態が考えられ、アイなしの演出も可能であろう。

■作曲・作舞のことなど

復曲の柱となる作曲作舞は観世鍔之丞氏に委嘱した。世阿弥本は殆どカタカナ書きで、「次第」や「サシ事」などの小段名、上・下・クルなどの音階名、延(ヤヲハの間らしい)といった間拍子なども少しは記されているが、全体的に節付は殆んど無いに等しい。後ジテの出に「大コ」とあるので太鼓が入ったことは確かだが、観世氏はそういったわずかに記載された事柄を参照しつつ、今日の舞台で上演できる形に復曲された。素拙風の世阿弥本以外、何も残っていないため、いろいろと苦心されたと思う。折柄、57年5月末から約一ヶ月間、鍔仙会を中心とする世阿弥座の欧州公演もあって、作曲が完成するまでに時間がかかり、心配になったが、夏に入り、ようやく作曲も固まったので、早速、横道氏が目通しを受けつつ西野が稽古用の謡本を作り、一噌幸政(笛)・北村治(小鼓)・柿原崇志(大鼓)・観世元信(太鼓)の各氏が手配りを考えるなどの作調にあたった。配役が決まり、日程表を作成し、地謡を担当する鍔仙会の方がたをまじえて稽古に入ったのは、当日まで一ヶ月余という状況にあったが、稽古を重ねるごとに加速度的にまとまっていき、当日は無事演了することができた。演出の隅々まで十分に検討する余裕があったらと感じた面もあるが(ともかく役者側の多忙は想像以上だった)、短時日のうちに練上げ、舞台化を実現された力量に改めて敬服している。

■準備段階・および当日のこと

世阿弥本「雲林院」は室町末期はおろか室町中頃には演じられなくなっていたらしく、今回の試演が約五五〇年ぶりということもあって、能楽関係の新聞・雑誌に企画を発表し、案内状やチラシを配布し、西野作成のポスターを送付するなどして受付を開始

始した9月に入るや（学内の教職員・招待者のほか、三〇〇名を入場無料、但し資料代実費千円で招待）、学内外の反響が大きく、まもなく満席となって、相当数お断りせざるをえなかった。当日は、パンフレット「世阿弥本による〔雲林院〕試演の会」（B5判16頁）と、試演のために作成した謡本（袋綴半紙本・十四丁）を配布した。

会場は、神戸・大阪・京都方面からも来られた熱心な観客の試演に寄せる期待や緊張のみなざるなか、午後六時に始まり、解説（西野）のあと六時二十五分開演、滞りなく進行し、八時四分終了した。所要時間は約一時間四十分であった。

■復曲の立場——今後の課題

着流尉出立の前ジテはともかく、二条の后と基経の霊はどのような装束をつけていたであろうか。古典大系本の推定演出では二条の后を「長絹大口女出立（紅入）か」、基経を「法被半切怪士出立か」としている。今回は、種々の検討を経て別掲（資料2）の通りとし、型付も資料3に示したごとくである。できれば上演を重ね、演出を練りあげていきたいと考えているが、こうした装束付や型付なども含め、復曲の際の台本の取扱い方にはおよそ三つの立場が想定される。それは、昭和57年12月20日、「世阿弥本（雲林院）をめぐって」というテーマで表章・観世鍊之丞氏を講師に、また野村万之丞氏にも出席いただいた第124回能楽懇談会での横道氏の御意見であるが、(一)世阿弥本の忠実な復原（型も装束も再現し、節付も古い拍子当りや古音階に復原し、世阿弥時代の演出を再現する）、(二)現代の能の演出で再現する（世阿弥本が中絶せずに伝わっていたらどうなるか、という視点）、(三)現代の能として新たに作る、の三つの立場である。試演ではこの三者がは

っきりしないという批評をいただいた。たしかに、本文は世阿弥本に基づいているが、待謡の「上ゲ哥」を現行「雲林院」から転用して加え、後ジテの登場歌の「下ノ詠」（白玉か…）をツレの出に移すなど小部分の変更があったので、許容範囲が問題になるが台本に忠実とはいえないかもしれない。基本的には第二の立場に立って進めたが、将来、再演する場合には、どの立場に立つかを明確にしたいと思う。このたびは世阿弥本「雲林院」を採りあげたが、試演に値する能は他にもあり、今後も研究的な催しを企画していきたい。この試演能のあと、「大般若」、古作による改作「雲林院」、「重衡」、「治親」などの復曲が相次ぎ、「松浦佐用姫」「布留」など数曲が予定されている。今回の試演能が復曲活動の契機となったかのようなのである。

なお、当初は、西野が中心になって進めるはずであったが、56年4月から一年間、文学部副主任の事に忙殺されたことや健康上の理由もあって進行の中心がはっきりせず、人的構成が曖昧となり、御協力いただいた方々に御迷惑をおかけしたことをお詫び申し上げますとともに、改めて御礼申しあげる。

〔資料1、番組〕

解説

能雲 林 院——世阿弥本による——

西野 春雄

前シテII老人(化身)

観世 栄夫

後シテII藤原基経(霊)

観世鍊之丞

後ツレII二条の后(霊)

野村 四郎

ワキII芦屋の里の公光

宝生 閑

アイII同朋万阿弥

野村万之丞

笛 一噌 幸政

小鼓 北村 治

大鼓 柿原 崇志

太鼓 観世 元信

岡田 晴義 観世 曉夫

西村 高夫 浅見 真州

浅井 文義 山本 順之

北浪 昭雄 若松 健史

後見

清水 寛二
永島 忠修

地謡

〔資料2、装束付〕

前シテ 老人(化身)

面・笑尉、尉髪、著附・小格子厚板、水衣、緞子腰帶、尉扇

後シテ 藤原基経(霊)

面・筋男、初冠、著附・白地厚板、指貫 萌黄、单狩衣紺、黒頭、笏金、山姥扇、松明

後ツレ 二条の后(霊)

面・増、鬢、紅入鬢帶、著附・摺箔、白練壺折、緋大口、紅入腰帶、鬢扇、杖

ワ キ 芦屋の公光

著附・段熨斗目、白大口、掛素袍、紋付腰帶、小刀、白骨紅無中啓、守袋、男笠

ワ キ 連 従者(二人)

著附・無地熨斗目、素袍上下、小刀、鎮扇

ア イ 同朋万阿弥

著附・段熨斗目、括袴、紋付腰帶、十徳、角頭巾、撞木杖に瓢つけ桜花挿す

◎作り物 しだれ桜の塚。引廻しの色、紫。

〔資料3、舞台経過〕

【前場】

1、囃子方座着くと、後見が塚の作り物を大小前に出す。

2、〔次第〕にてワキ・ワキツレ(二人)登場、ワキ、常座でかけて

正先へ行き、正へ出、向き直って伴のツレと向き合う。地取、常の如し。〔名ノリ〕済み、正へ向く。ツレ二人は片膝立つ。

〔上哥(道行)〕、向き合ったまま、「難波津に」の打切にワキは正へ向く。「遠かりし」と正へ出、「着きにけり」と納めながら入れ違い、正中で正へ向く。ツレ二人は座着く。

3、「所は夢に違はねども」と右受けて角を見る。ここで幕上る。「いつまであるべきぞ」と正へ直し、「木陰に立ち寄り」と脇座向き、出、「花を折る」と謡い、一度、足とめ、脇座へ行く。

4、シテ、「誰そやう花折るは…」と呼掛けながら出る。三ノ松でワキを向き、ワキは脇座で正かけたまま。「まことの風は吹かぬに」と直して出る。〔問答〕、シテは二ノ松で足とめ、「さればこそこれに人の候」とワキへ向く(ワキも向く)。

5、シテは「そこ退き給へ」と強く言い、ワキの「それ花は」を聞いて直して出る。一ノ松で足とめ、「風よりも辛き人や」とワキへ向き、「あら何ともなの人や」と右へ大きく見わたす。ワキの「何とて素性法師」を聞きながら直して出る。古歌問答の一。

6、シテ「さやうに詠むもあり」と舞台に入る。「避ぎて吹け」と常座で止る。「然れば千顆萬顆」とワキへ向き、「折らせ申すことは候ふまじ」と詰め、すぐ正へ直し、「われは申さずとも」とワキへ向き「言ひつべし」と詰める。古歌問答の二。

7、「げに枝を惜しむの(上哥)(初同)で正へ直してサラ／＼と出、「手折るは」と足とめて「見ぬ人のため」と左へ大きくあしらってワキへ向く。打切で直し、「二つの色の」と左へ小さく回り、「こき交せて」と常座で正へ二足出、ヒラク。古歌問答の三。

8、〔問答〕でシテはワキへ向き、「おことは」と向く。「これは津

の国」と直す。「雲の林とは」とあしらう。「これこそ」と直し、「さては」とユックリと左受け、「この花の」と塚を向く。「伊勢物語を」とワキへ向き、「さらば今夜は」と直し、「その様年さまとしの古びやう」とあしらひ、「業平にてましますか」と直し、「いや」と詰める。

9、「わが名を今は明石渦」で抑えて出、打切にワキは座着く。返しにシテは「心ゆえ」と大小前でとまり、大きくかけて「花に」とワキへ向く。「誠に昔を」と身をのぼし、「一枝の花」と出、「蔭に寝て」と正中でさし、「有様を見給はば」とひらく。「不審を開かん」と大きく(じっくり)つめ、「夕べの空」と右へ小さく回り、「一霞」と常座へ行き、正へ当て、「なりにけり」とヒラキ、返しの「なりにける」と右受けて、入る。笛、アッライ、淡々と幕へ中入りする。(ここまで約四十分)

【アイの段】

10、囃子方、床几下り、地謡が扇横にひくと、幕上る。アイは幕内から「川岸の」の舟唄を謡い、「あらはれにけりや」と幕出、「やよがりもそうよの」と一ノ松でとめ、謡いっぱいに正へ向き詰める。「名ノリ」ののち、舞台へ出る。

11、「まことに毎年とは」と常座から道行のていで、角で脇座奥を見、「いやあれに花の盛り」と言い、「このあたりは」と左へ見渡し、「紫野にて候、定めて雲林院の旧跡でござろう」と塚へ向き、「ははー咲いたり、くく」と右へ見、ワキを見付ける。

12、正中へ行き、「いやのうのう」と声かけ、下に居る。「問答」、常の如くあってアイ正面へ直して「まづかの伊勢物語に」と語り出す。語りのうち所々ワキとあしらひ、「問答」になり、アイ

「さらばお暇仕りませう」と立ち、杖かたげて狂言座へひく。(アイの段は約二十分。合計ここまで約六十分)

【後場】

13、囃子方、床几に着くと、ワキ・ワキツレ「いざさらば…」と謡い出す。返しでアイは切戸よりひく。「暮れなば」と大小笛あしらう。

14、謡切ると「習ノ一声」となり、やがてツレは「白玉か」(下ノ詠)と謡い出す。「夜半の暁」で後見が引廻しおろす。ツレは「いで昔を語らん」とすわり、「語りけり」とワキへ向く。

15、打カケにかまわずに「そもそもこの物語は」(クリ)と謡い、「何事によって」と左足から出、「理かな」と立ちつくす。「サシ」はツレと地との掛け合。「定めありぬべき」とワキへ向き小さく詰める。打切で直す。

16、「(クセ)」にうつり、「げに春日野」と正へシカケ、「内なれや」とヒラキ、「然れば」と扇ひらき、「牡鹿の角」と右へあつかって左右し、「かくれかねたる」と正面へ打込、右へ小さく回り、正中へ行き、「武蔵野は」(上ノ詠)で正面むき、「若草の」と三ツユリで幕上る。「夫も籠もれり」と太鼓刻み出し、ツレは扇閉じて下居。

17、後シテ、「出端」で登場し、一ノ松で正面向くと太鼓上げる。
18、「そもそもこれは…」(サシ)と謡い、「現はし見せんとて」と右向け、「后もここに」とツレを見て正面へ向く。

19、「姿を見せん」とツレを見、「形は悪鬼」と左袖、右袖を巻き、「身は基経が」と両腕を左右へ広げるように上げる。「常なき姿に」と太鼓地に直して出、「なすとかや」と常座へ出る。

- 20、「掛ヶ合」のうち、「今宵現はして」とワキへ向き、ツレは「またいにしへ」と立って右うけ、「武蔵野さして」と角へ出、目付前にとまる。シテは正中に出、ツレへ向き、「いづくまでか」と正面へ大きくさし、ツレは「昔も籠りし」と右へ回り、「内へ逃げ入り」と塚の右側から入る。
- 21、シテは常座へクツロギ、松明とる。ツレは「御うしろ影も」と下居し肩杖。シテは常座へ出、「暗さは暗し」と松明振りあげ、「如何にせん」とおさめる。
- 22、「立回り」で、シテは正面へ三足出、左むき、脇座へ出、正先で大きく右へさし廻し笛柱へ向く。塚へ出、正中で正面へ向き、松明ふりながら正先へ出、正面へさし、右へ大きく廻り、常座へ行くとき大小、シカケル。
- 23、「この野に火をとぼし」(哥)で三足出、かけて角へ行き、左へ小さく回り、脇正から塚の方へ向き出、「ここにひとつの」と右へ回り塚へ向き、「怪しけれ」と正中できめ、「松明ふりたて」と振りあげて六拍子。松明捨てて扇ぬき、左前程に手をかけるように内を見込む。
- 24、「げにまこと」ツレは正面から出、シテはツレの左肩に両手を重ね、ツレは下居。シテは右へ回って常座へ行き、ツレの右肩に左手かけ、扇ふりあげて「後の宮や」できめる。
- 25、「年を経て」(ロンギ)以下、シテは静かに一ノ松へ出、床几にかける。ツレは立ち、「野とやなりなん」と左うけ、脇むく。「着つつ馴れにし」とツレ右うけて角を見、「遙々来ぬる」とじつくりと胸杖。「若しや」と面伏せる。「現か夢か」と手放し、正面へ向き出る。「行き行きて」と正中でとめ、「隅田川原」と右うけて角むき、「都鳥」と右手あげて見る。「言問はん」と正へ直す。「まことに東か」と左上から右下(角)へ見渡し、「まことは春日野」と直す。
- 26、地「まことは春日野の」とシテ立ち、ツレ正中で下居。「飛ぶ火の野守」でシテは脇正、出、ツレは常座へ行き、「三笠山」と正中へ出、笛柱から角へマワシザシ、右へ回って塚へむき、ヒラキ、「この武蔵塚よりも」と正中前へ出、(ツレは橋掛り一ノ松)、脇正へ出てさし、「夜も明けて」と正中先で脇柱向き雲の扇。(ツレは幕へ入る)。
- 27、「あたりを見れば」と見まわし、「都紫野」と正面向き、「雲林院の」と右へ乗り込み拍子、正へさして出、正中先でふり向き、左袖かけ、常座へ出、正へあて、ヒラキ(なりにけれ)、「みな夢とこそ」と左袖かけ、脇正へ出て留拍子。
- (後場、約四十分。合計、全体で約一時間四十分。右の記録は松本雍氏のメモを参照させていただいた。)
- 〔資料4、アイの段の詞章〕
- アイ 川岸の、根白の柳、あらはれにけりや、そうよの。あらはれて、いつかは、いつかは、川の水上清く、清く候。君と君と、我と我と、君と、枕定めて、枕定めぬ、やようがりもそうよの。これは、さるおん方の同朋に万阿弥と申す者でござる、今日は北山の花をたづね、日一日歌など詠じてござるが、もはや暮れ近うござるによって、宿元へ帰らうと存ずる。誠に毎年とは申しながら、花に限って見捨てはならぬこととござる。いや、あれにも花の雲が見ゆる。このあたりは紫野じゃによって、さだめて雲林院の旧跡でがなござらう。ははー咲いたり咲いたり、近づけば又一

段と見事な、咲きも残らず散りもはじめずといふはこのことじゃ。いや、あの花蔭に誰やらつつくりとしてゐらるる、ちと言葉をかけう。いやのうのう、方々はいづくよりおん出での人ぞ

ワキ これは津の国芦屋の里に、公光と申す者にて候、われ若年より伊勢物語に好き候ふゆゑか、不思議の霊夢を蒙りて候ふほどに、告にまかせてこの所に参りて候

アイ さてさてそれは奇特なことござる。私はさるおん方の同朋に、万阿弥と申す者でござるが、歌連歌の道をたしなみ、伊勢物語もそと読うだことがござる。方がたは若年より好ませらるるとござれば、さだめて秘事口伝をも受けさせられたでござろう。知るも知らぬも花の友とやら申す、慮外ながら、ちと不審申したうござるが、なんとござりましょう

ワキ それはともかくにて候

アイ ご承引かたじけなうござる。さて、かの物語は伊勢の国の話でもなし、また伊勢という人の話でもなし、とかく伊勢に縁ありとも覚えませぬが、なぜに伊勢物語と申すぞ、その子細承りたうござる

ワキ さればこそ大事のことをおん尋ね候ふものかな。このこと秘事の第一にて、たやすく明かす儀にてはなく候ふさりながら、おことの執心のほど知らんがため、ご存じの口伝も候はばおん聞かせ候へ

アイ さやうに仰せらるれば、お伽の折節、上つ方より聞きはつたこともござれば、そとお話し申しあげうと存じます。まづかの伊勢物語に、「昔男ありけり」とあるその「昔男」とは、在原の中將業平のことじゃと承つてござる。業平は世に聞こえたる

色好みにて、一期のうちに三千七百人の女性と契りを結ばれたると申すが、昔も今もかやうの上つ方がましますによって、われら

ごときも媒介にいそがはしいことござる。さて業平は三千余人の女性のうちより紀の有常の女染殿の後、あはせて十二人を選び伊勢物語に書き願はしたと申す。中にも深い女性は、二条の後にて、この君若うてただ人にておはすころ、業平が思ひをよせ、ひそかに盗み出だしたると申す。その子細を書き記したる芥川の段に「鬼一口に食ひてけり」とあるが、誠に鬼が出て食うたではござらぬ、そのとき後の兄藤原の基経、妹恋しと思ふあまり、鬼のごとくに怒り狂ひ、空をかけるていにて追つつき、ついに后を奪ひ返したと申すが、そのさまがあまり恐ろしうござつたによつて、物語の本文に「あばらなる蔵に女を隠し置きたるを、鬼はや一口に食いてけり」と、かやうに書き願はしたると承つてござる。また鬼の現はれたる所は武蔵野じゃと申します。その子細は、物語の別の段に「人のむすめを盗みて武蔵野へ率て行く」とあり、また女の歌にも「武蔵野は今日はな焼きそ若草のつまもこもれり我もこもれり」とあるが、そのしるしじゃと申す。女をつれて遙か遠国の武蔵野まで逃ぐると申すは、さてさてまめなことかなとあつて、かの業平にまめ男と異名をつけたると、上つ方より聞き及びましてござる。

ワキ 詳しくも語られ候ふものかな、われらが口伝にもあらあら合ひ当りて候ふさりながら、鬼の出でたるは武蔵野にてはなく、誠は春日野にて候、かの歌を古今集には「春日野は今日はな焼きそ」と候へば、これこそ誠なるべきを、事のよしをおほめかし、わざと武蔵野に言ひかへたると相伝仕りて候

アイ 仰せごもつともでござる、さて最前も申すごとく伊勢物語と名付けたる子細、ねんごろに承りたうござる

ワキ そのことにて候、かの物語は、今のことを昔に言ひなし、奥にあるべきをはじめに書くなどして、伊勢を日向と言ひなしたるごとくなれば、「伊勢や日向」と申すことわざに寄せて、伊勢物語と名づけたるげに候ふよ

アイ さてさて奥深き儀を承り、ちかごろ満足いたすことござる、さて日も暮れ果てましてござるが、公光殿にはいまだこれにおん入りあるか、何とござるぞ

ワキ われらは存ずる子細も候ふまた、ここは二条の後の旧跡なれば、今宵は花の蔭に宿り一夜を明かしたう候

アイ われらも共ども通夜申したうはござれども、叶はぬ用のこともござれば、もはやかう参ります

ワキ 日も暮れ果てて候ふほどに、心しておん帰り候へ

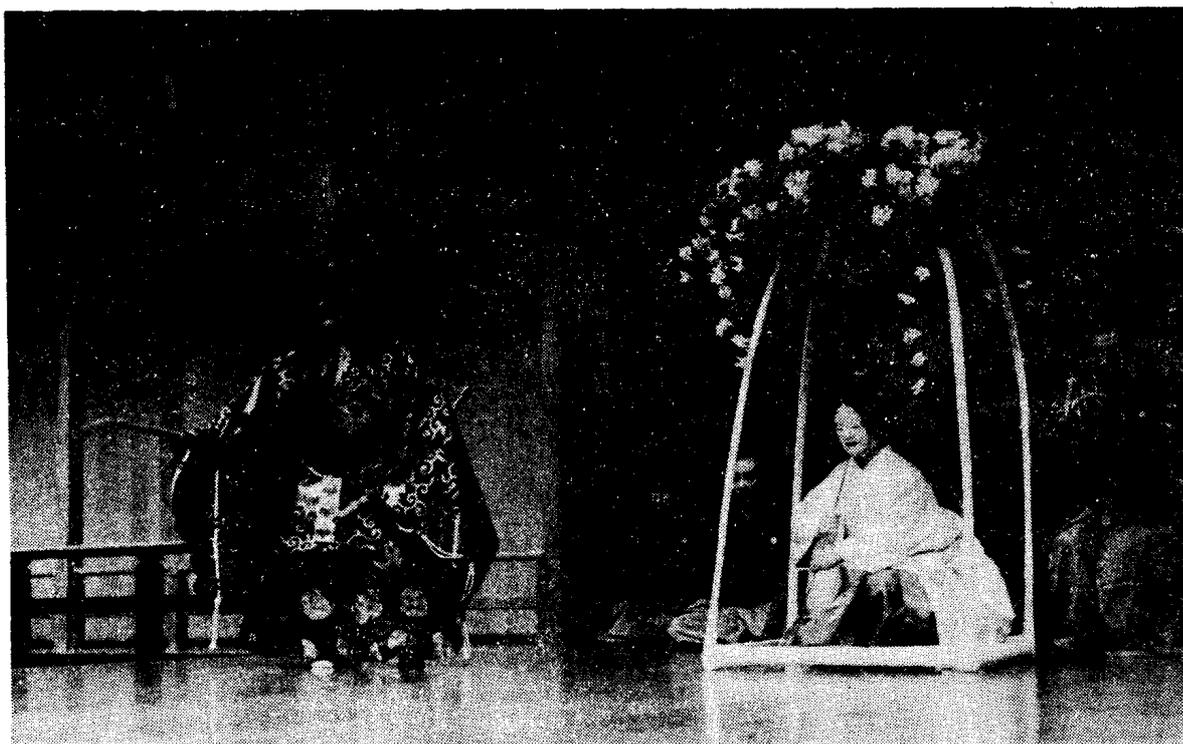
アイ かたじけなふござる、さらばお暇仕りませう。

〔資料5、制作スタッフ〕

観世鏡之丞(観世流シテ方)、観世栄夫(同)、宝生閑(下掛宝生流ワキ方)、野村万之丞(和泉流狂言方)、一噌幸政(一噌流笛方)、北村治(大倉流小鼓方)、観世元信(観世流太鼓方)、横道萬里雄(東京芸術大学教授)、表 章(能楽研究所所員)、西野春雄(同)、荻原達子(能楽プロデューサー)

〔資料6、放送〕

昭和58年1月9日(日)・16日(日)、NHK・FM放送(午前7時10分〜55分)で、二回に分け番噺子にて放送。時間の都合もありワキの登場の段など一部省略して放送した。話、西野春雄。



世阿弥本による〈雲林院〉の後場

(撮影/吉越立雄)